

まことの食べ物、まことの飲み物

ヨハネの福音書 6章 52-59節

はじめに

今日の聖書箇所 59 節に、「**これが、イエスがカペナウムで教えられたとき、会堂で話されたことである**」とあります。今日の聖書箇所は、イエス様が「カペナウム」という町の会堂で語られた内容が書かれています。この会堂でイエス様の話を聞いている人々の中には、イエス様が五つのパンと二匹の魚を増やして、五千人の人々を満腹にした奇跡を見ていた人もいました。ですからイエス様は、「パン」というキーワードを用いて、話を進めて来られました。58 節でも、「**これは天から下って来たパンです。先祖が食べて、なお死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます**」とある通りです。イエス様が与えるパンを食べる者は、永遠に生きるようになると言われてきました。

1. ユダヤ人たちの激しい議論

では、イエス様が与えるパンとは、どんなパンなのでしょう。今日の聖書箇所 51 節でイエス様は、こう言われました。「**わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。そして、わたしが与えるパンは、世のいのちのためのわたしの肉です**」。イエス様はこれまで、イエス様が与えるパンとは、イエス様ご自身のことであると何度も言われてきました（6：35、41、48）。しかし 51 節から今日の聖書箇所にかけて、イエス様はそのパンについてもう少し具体的に語っていかれます。イエス様が与えるパンは、イエス様ご自身であることには変わりないのですが、そのパンは、実はイエス様の「肉」のことだと言われるのです。そしてイエス様は、今日の聖書箇所 54 節で、「**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています**」と言われるのです。永遠のいのちを持つためには、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲まなければならないと言われるのです。

イエス様の肉を食べなければ、永遠のいのちを持つことができないという話を聞いて、ユダヤ人たちは、互いに激しい議論を始めたと言われています。クリスチャンの人たちは、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むと聞くと、何となく聖餐式のことを自然と頭に浮かぶと思います。聖餐式で用いられるパンは、イエス様が十字架で裂かれた「肉」を表し、ぶどうジュースはイエス様が十字架で流された「血」を表します。その意味で、クリスチャンの人たちは、聖餐式でパンを食べ、ぶどうジュースを飲むことで、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲んでいると言えます。

しかし当時のユダヤ人たちは、聖餐式のことを知りません。ですから、どうやってイエス

様の肉を食べ、イエス様の血を飲むのかと互いに激しい議論になったのです。というのは、ユダヤ人たちは、旧約聖書の律法で血を飲むことを禁じられていたからです。例えば、旧約聖書のレビ 17：10-11 にはこうあります。「**イスラエルの家の者、あるいは彼らの間に寄留している者のだれであっても、どんな血でも食べるなら、わたしはその血を食べた者に敵対してわたしの顔を向け、その人をその民の間から断ち切る。実に、肉のいのちは血の中にある**」。血は、いのちそのものを表します。それゆえに、血を飲むことが禁じられているのです。万が一、血を飲む人は、神様の敵となり、ユダヤ人社会から追放されてしまうのです。このような律法があるため、ユダヤ人たちはイエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むなどあり得ないと考えたのです。

私たちも、もし聖餐式を知らなかったら、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むと聞いても、それは一体どういう意味だろうと考え込んでしまうと思います。人の肉を食べ、人の血を飲むなど、倫理的にできない、あるいは気持ち悪くてできないと思うでしょう。昔の教会はまさに、そのように誤解されていたようです。「クリスチャンたちはいつも集まっているが、何をしているか分からない。噂によれば、皆でイエスという男の肉を食べ、血を飲んでいるらしい」。昔の教会は、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むということが文字通り受け取られ、クリスチャンたちは残忍で、野蛮な人たちであるという悪い噂を流されていたようです。

イエス様は、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています」と言われます。私たちがもし聖餐式に与っているなら、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲んでいるのです。そして、「永遠のいのち」を今、確かに持っている、「永遠のいのち」に今、確かに生かされていると言うことができるのです。

2. イエスの肉を食べ、イエスの血を飲む者

① 永遠のいのちを持っている

イエス様は、53 節でこう言われます。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません**」。「人の子」というのは、イエス様のことです。イエス様は、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲まなければ、私たちの内に、「いのち」つまり「永遠のいのち」はないと言われます。イエス様によれば、私たちは聖餐式に与らなければ、「永遠のいのち」を持つことができないのです。

では聖餐式は、どのようにしたら与ることができるのでしょうか。それは、自分の罪を悔い改め、イエス様への信仰を告白することです。そして洗礼を受けることです。①罪の悔い改め、②イエス様への信仰、③洗礼、の三つが聖餐式に与るためには必要です。例えば、罪を悔い改めて、イエス様への信仰を持っていても、洗礼を受けていなければ、聖餐式に与ることはできません。そういう方には、ぜひ一日も早く洗礼を受けることをお勧めします。また、洗礼を受けていても、罪の悔い改めやイエス様への信仰を持っていなければ、聖餐式に与ることはできません。これは、幼児洗礼を受けていても、信仰告白をしていない人のこと

です。そういう方は、ぜひ一日も早く信仰告白をすることをお勧めします。また、イエス様への信仰を持ち洗礼を受けていても、罪の悔い改めをしていなければ、聖餐式に与ることはできません。これは、洗礼を受けていても、大きな罪を犯し陪餐停止の戒規を受けている人のことです。そういう方は、ぜひ一日も早く罪の悔い改めをすることをお勧めします。

もちろん、聖餐式が自動的に、また機械的に、私たちに「永遠のいのち」を与えるものではありません。罪の悔い改めとイエス様への信仰こそが、私たちに「永遠のいのち」を与えるものです。しかし「永遠のいのち」は、日々、養われなければなりません。私たちの「肉体のいのち」が、ご飯を食べ、みそ汁を飲むことによって養われているように、私たちの「永遠のいのち」も、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲むことによって養われていくのです。つまり、「永遠のいのち」は、聖餐式によって養われていくのです。イエス様は55節で、「**わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです**」と言われました。イエス様の肉と血は、私たちの「永遠のいのち」を養う「まことの食べ物」「まことの飲み物」なのです。

では、「永遠のいのち」とは何でしょうか。54節でイエス様は、「**わたしは終わりの日にその人をよみがえらせませす**」と言われます。「永遠のいのち」とは、永遠にイエス様と繋がっているいのちです。「永遠のいのち」を持っている人は、たとえ肉体的に死んでも、終わりの日にイエス様によってよみがえらせてもらえるのです。「終わりの日」とは、イエス様がこの地上に再び来られる世の終わりの時です。「永遠のいのち」を持っている人は、たとえ肉体的に死んでも、イエス様とずっと繋がっているのです。たとえ肉体的に死んでも、イエス様との関係は決して切れないのです。「終わりの日」によみがえるまで、そしてその後も「永遠に」決して切れないのです。イエス様と永遠に繋がっていること、それが「永遠のいのち」です。「永遠のいのち」は、私たちを死の恐怖から救ってくれます。なぜなら、私たちはたとえ死んでも、イエス様と繋がっていて、終わりの日によみがえるまで、イエス様と共に天国にいることになるからです。私たちは、聖餐式に与るごとに、「永遠のいのち」が与えられていることを覚えるのです。

② イエスのうちにとどまり、イエスもその人のうちにとどまる

イエス様は56節で、こう言われます。「**わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります**」。イエス様は、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲む人のうちに、とどまってくださいます。つまりイエス様は、聖餐式に与る人のうちに、とどまってくださいます。「とどまる」という言葉は、「滞在する」「住む」「宿る」という意味の言葉です。イエス様は、聖餐式に与る人の内側に住んでいてくださるのです。聖餐式のパンを食べ、ぶどうジュースを飲む時に、そのパンやぶどうジュースは、私たちの胃の中に入ります。それと同じように、聖餐式のパンを食べ、ぶどうジュースを飲むたびに、イエス様は私たちの内側に宿ってくださいます。つまり共にいてくださるのです。私たちは、聖餐式に与るごとに、イエス様が私たちの内側にいてくださる、共にいてくだ

さるということを感じるのです。

しかしイエス様は、聖餐式に与る人のうちにとどまってくたださるだけでなく、聖餐式に与る人も、イエス様のうちにとどまると言われます。イエス様が私たちの内にとどまってくたださるだけでなく、私たちもイエス様のうちにとどまらなければなりません。イエス様は、ヨハネ 15：4-5 でこう言われます。「わたしにとどまりなさい。わたしもあなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木にとどまっていなければ、自分では実を結ぶことができないのと同じように、あなたがたもわたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです」。イエス様は私たちに、「わたしにとどまりなさい」と言われます。イエス様は私たちに、多くの実を結ぶ人生を期待しておられます。そのためには、イエス様が私たちのうちにとどまってくたださるだけでなく、私たちもイエス様のうちにとどまらなければなりません。私たちは、聖餐式に与るごとに、イエス様のうちにとどまる決心を新たにしなければなりません。

③ イエスによって生きる

イエス様は 57 節で、こう言われます。「生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです」。イエス様は、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲む者は、「イエス様によって生きる」と言われます。ここでの「イエス様によって生きる」という言葉は、「イエス様のために生きる」とも訳せる言葉です。神様は、イエス様をこの世に遣わし、イエス様は神様のために生きられました。38 節で、「わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです」と言われた通りです。イエス様は、自分の思いを行うためではなく、神様の御心を行うためにこそ、生きられたのです。同じように、イエス様の肉を食べ、イエス様の血を飲む人は、自分の思いを行うためではなく、イエス様の御心を行うためにこそ、生きるようになるのです。いや、そのように生きなければならないのです。

血は、「いのち」そのものを表します。イエス様は、私たちに御自身の血を飲むようにと言われます。それは、私たちに御自身の「いのち」を与えることを意味します。イエス様は私たちに、「永遠のいのち」を与えるために、十字架で肉を裂き、血を流して、御自身の「いのち」を与えてくださいました。それは、私たちと永遠に繋がるため、私たちを死の恐怖から救うため、私たちと共にいるため、私たちが多くの実を結ぶためです。私たちは、イエス様によって「永遠のいのち」を与えられ、その「いのち」に今、生かされています。私たちは、この「いのち」をどのように使うことが求められているのでしょうか。自分の思いを行うためでしょうか。それとも私たちのために御自身の「いのち」を与えてくださったイエス様の御心を行うためでしょうか。私たちは、聖餐式に与るごとに、自分は何のために生きているのか、この「いのち」をどのように使うべきなのかが、問われているのです。

おわりに

今日の聖書箇所 54-58 節に出てくる「食べる」という言葉は、特別な言葉が使われています。ギリシャ語では、「トロゴー」という言葉で、動物がエサを食べる時に使われる言葉です。それは、バリバリ食べる、ムシャムシャ食べるというような時に使われる言葉です。決してお行儀の良い食べ方ではありません。イエス様は、そのような食べ方で、「わたしの肉を食べなさい、わたしの血を飲みなさい」と言われるのです。

私の家では、二か月前から子犬を飼っています。一日二回、朝と夕に食事をあげます。毎回同じドッグフードを、30g ずつあげます。まだ子犬ですので、お湯でふやかしてからあげます。しかしウチの子犬は、その食事を毎回楽しみにしています。ドッグフードが入っているお皿が遠くから運ばれて来るのを見るだけで、舌で口の周りをペロペロさせ、飛び跳ねて喜びます。そして、食事をあげると 1 分も経たないうちに、あっという間に食べてしまいます。そして食べ終わると、お皿を内側も外側もペロペロなめ回します。決してお行儀の良い食べ方ではありません。

しかしイエス様は、この子犬のように聖餐式に与ることを求めておられるのではないのでしょうか。子犬の食事は、少量ですぐに食べ終わってしまう、いつも同じメニューです。聖餐式も、小さなパンとわずかなぶどうジュースで、すぐに食べ終わってしまう同じメニューです。子犬はあんなに食事を心待ちにして、喜んで食べているのに、私たちはあんなに聖餐式を心待ちにして、喜んで食べているだろうかと考えさせられました。

聖餐式は、私たちにとって「まことの食べ物、まことの飲み物」です。私たちに与えられている「永遠のいのち」を養うものです。「肉体のいのち」を養う食事でも大切でしょう。しかし、「永遠のいのち」を養う食事は、さらに大切なものではないでしょうか。

もし皆さんの中で、まだこの聖餐式に与っていない人がいれば、ぜひ一日でも早くこの聖餐式に与り、「永遠のいのち」に生かされてほしいと願います。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちはかつて、唯一の真の神様の子であるイエス様から離れて生きて、「いのち」を持っていませんでした。しかしイエス様は、私たちのために、御自身の「いのち」を与えて、十字架で肉を裂き、血を流してくださいました。そして、「わたしの肉を食べよ、わたしの血を飲め」と言われます。どうか私たち一人ひとりが、信仰をもって、そして喜びをもって、イエス様の肉と血を味わうことができますように。そして、イエス様の肉と血を味わう者に与えられる祝福に生かされることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。